

---

# 物理魔女の記録

宗像竜子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

物理魔女の記録

### 【Nコード】

N6498P

### 【作者名】

宗像竜子

### 【あらすじ】

MMORPG『RED STONE』のキャラなりきりブログ「物理魔女の記録」で公開していたおまけ小話を集めたものです。通常の小説の書き方とは違いますので、作品を読む前に必ず「初めにお読みください」をご覧ください。

## 初めにお読みください

こちらは「みてみん」に画像移行中のMMORPG『Redstone』の非公式プレイブログ「物理魔女の記録」より、画像に付随して書いていた小話の転載となります。

全ての画像に対して小話をつけていた訳でもなく、全てその場で即興で書いたものという事もあり（推敲なし）、時間軸などが超いい加減です（リアルの年中行事に関連しているものもある為）。

元々そうした事を目的としたブログでもなかったため、基本的に未プレイの方にはわかりづらい作品となっています。

また、ブログがキャラなりきり形式だった為、個性を出す演出で通常記事に使っていた固有顔文字が作中にも使われています。ご了承ください。

父（Bis/天使）・母（知識魔女）は生死不明、四人は訳あってそれぞれバラバラの場所で育って、最近になって再会 四人揃って暮らすようになった、というオリジナル設定です。

二次小説のようなものですが、今まで二次を書いた事がなかった事もあり、ちゃんと二次になっているのかは怪しいです（笑）

なお、宗像はマイナー職・スキルが大好きなのであまり王道ではないキャラが多いです（物理魔女は現在だと最終形態に近いようですが、当時はやる人も少ないマイナー職でした）。

職業などの詳細は公式様（<http://members.reasonline.jp/>）をご参照下さい。


## 簡単なうちの子設定

<長女・サナティール／物理リトル>

・18歳

・四人の中では料理が一番上手

・弱冠泣き上戸の気があるらしい

・外見も性格も母似

・マゾい職の為か、意外とシビアで苦勞性で個性の強い妹達に翻弄されがち

・実はカナヅチ（泳げない）

・固定顔文字は「（・ワ・）」

物理魔女：物理系攻撃をメインスキルにするリトルウィッチ

<次女・リトルルド／GPマジアチャ>

・17歳

・実は結構シスコン（だが愛情の方向が何処か違う方向を向いている）

・顔色は全く変わらないがすさまじい下戸（突然バタリと行く）

・外見も性格も父似

・ボケなのか本気なのかわからない言動で、サナによくツッコミをもらう

・固定顔文字は「（・ー・）」

GPマジアチャ：GP<ガーディアンポスト>をメインスキルにする知識アーチャー

<三女・チエナ／魚鳥サマナー>

・15歳

・ペットの山葵（わさび／ゴートマンズin）が大好き

・旅先で珍しい物を見つけるとお土産に持って帰ってくる

・外見は父似、中身は母似

- ・ おとぼけと見せかけて、割と毒舌
- ・ 固定顔文字は「(。°。\*)」

魚鳥サマナー：四属性の召喚獣の内、メインをスウェルファー（水）サブをウィンディー（風）とするサマナー

< 四女・ルフェルトナノボトル姫 >

- ・ 13歳
- ・ 露天商の為、四人の家計のやり繰り担当
- ・ 末っ子なのに多分一番しっかり者
- ・ しっかりしているばかりに姉達がボケ属性ばかりのせいか、たいていツツコミ担当
- ・ 外見は母似、中身は父似
- ・ プリンセスだからか何故か姫言葉を使用
- ・ 姫なので顔文字なんて使いません（笑）

ボトル姫：ボトル投げをメインスキルにするプリンセス

初めにお読みください（後書き）

Copyright ? 2010 L&amp;K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.  
License to GameOn Co., Ltd.

**露天商・ルー。（前書き）**

今日も四女は露店をするようです。

## 露天商・ルー！

夕暮れ迫る古都ブルンネンシティグ。

ルフェルトナは露店を広げつつ、ため息をついた。

（はあ…今日も売れ行きが思わしくありませんでしたわ……）

姉妹がそれぞれ拾ってきたものを売りさばくのは、大抵四女のルフェルトナの役目だった。

長女のサナティーラは少しでも稼ぎを増やそうとレベル上げに血道をあげているし、次女のルイトルードはマイペースに生きているのでやはり滅多に家に帰らない。

三女のチェナは先日遙か東にあるバリアートまで遠征に出かけると言っただけまだ戻って来ないし、結局今日も留守を守るのは古都が拠点のルフェルトナになるのだった。

本人としては上の姉達のように何処かに出かけて狩りをしたりしたいのだが、誰かがアイテムを管理しなければ銀行はパンクし、貯金も増えない。

（本当に困った方々ですわ）

信頼されているのだとは思うが、もう少し考えて欲しいと常々思う。

（何でも拾ったものを銀行に入れておけばいいってもんじゃありませんことよ！）

過去に何度も説教したのに、銀行に空きが出来たかと思うとアイテムを突っ込む事を止めない。

それでも根が真面目なルフェルトナはそのまま換金も出来ず、頬を膨らませながらも露店を開いて姉達が拾ってきた物を並べるのだった。

人通りも少なくなってきた。かくなる上は最終手段だ。

「うつ…しくしく……」

必殺・嘘泣き。嘘とは言ってもその演技は迫真のもので、何事か





露天商・ル！。（後書き）

< 『物理魔女の記録』より転載 >

C o p y r i g h t ? 2 0 1 0 L & a m p ; K L o g i c  
K o r e a C o . , L t d . A l l R i g h t s R e  
s e r v e d .

L i c e n s e t o G a m e O n C o . , L t d .

## 物理魔女になった理由 (前書き)

四姉妹の組み合わせでどうやったら無理のない家族構成になるかを妄想した小話です。

## 物理魔女になった理由

古都ブルンネンシュティグから遠く離れた場所　　ドレム川流域。

その河口の一つにある、”ド”と呼ばれるダンジョンにサナティーラは来ていた。

手にするはその細腕と比べるといささかこつい感じが否めない少し古びたホール。それを慣れた手捌きでくるりと回し、天に掲げると鋭く叫ぶ。

「ウルトラノヴァ！」

すると、頭上を覆っているごつごつと荒い岩肌を見せる岩盤は何処へやら、無数の光が薄暗い闇を切り裂いてサナティーラが指し示す場所に降り注いだ！

そこにいたのは、死した後それでもこの世に留まり続ける哀れなモンスター　　アンデッド達だった。

光の属性を帯びたそれは、この世ならぬ何処から召喚された星の欠片。

一体どんな威力を帯びていたのか、その光を浴びたアンデッド達はその能力を低下させられている。だが、その光の激しさとは裏腹に、ダメージはほとんど与えられていなかった。

最初から低下のみが目的だとは言え、サナティーラは少し落ち込んだ。

サナティーラの職業はリトルウィッチ　　特殊な歌の力で能力を上げ、異界の星を呼ぶ者。故に、この世界では時として異能者、あるいは異端者として扱われる事もある。

それでもサナティーラはこの職業を誇りに思っていた。

何故なら彼女の母も、やはり同じリトルウィッチだったからだ。

ただし 同じと言っても、母は魔力が高く、同じウルトラノヴァでも低下のみならず攻撃魔法として使う事も出来たのだが。

『サナちゃん、なんでお母さんみたいに雷バリバリってやらないのー？』

ある時、妹のチェナからそんな事を尋ねられた事がある。

一般的にリトルウィッチは母のように魔力を武器とするものが多い為、その疑問も当然と言えば当然とも言えた。

その時はなんと答えたのだったか……。

そんな事を思い返す間に、ウルトラノヴァによって能力を下げられたモンスターが向かって来る。

サナティーラはホールを構え直すと、一番手前にいるモンスターに向かってホールを一閃させた。空振りと思いきや、そこから人の頭ほどの光が軌跡を描きながらモンスターへと飛ぶ。

> i 1 5 6 3 0 — 1 4 5 8 <

星が弾け、衝撃でモンスターがよろめいた。

コメットシューティング。

異界の星を召喚し、魔法ではなく弾丸のように打ち出すリトルウィッチのスキル。

ウルトラノヴァを放つ前に、自らにかけた幸運の星      スター  
ライトによって上昇した運は、その一撃を時にさらに強力なものにする。

こちらは先程のウルトラノヴァとは違い、確実なダメージを相手に与えていた。通常の二倍、時として四倍に膨れ上がったその攻撃により、次々にアンデッドは消滅してゆく。

サナティーラのように物理攻撃を得手とするリトルウィッチはあまり多くはない。それでもその道を進んだのは。



物理魔女になった理由（後書き）

< 『物理魔女の記録』より転載 >

Copyright ? 2010 L&amp;K Logic

Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.

Licensed to GameOn Co., Ltd.

## サマナーの願い事。(前書き)

あるクリスマスの出来事。



## サマナーの願い事。

私の名はケルビー。火を司る神獣である。  
よく見た目で犬扱いされるが

断じて「犬」ではない。

存在する次元からして違うので、同列に見られるのは正直腹立たしいのだが、今後もその扱いは変わりそうにない。

何しろ、主であるサマナーを運ぶ際のスキル名が「ライディング・ドッグ」、すなわち「犬乗り」……。三段階になり神獣らしい姿に進化してさえ、やっぱり「犬乗り」……。

ああ、なんと嘆かわしい事だろう。

世界中に散らばる同胞達もさぞ無念の涙を流しているに違いない。  
だが、ある日の事。

そんな扱いも吹き飛ばす悲劇的な出来事が私を襲ったのだった。

+ + +

私の主は名をチェナというサマナーである。

サマナーにも四種全ての神獣を使役する者はほとんどおらず、大抵その中の二種を主に召喚する。私の主は普段ウインディーとスウェルファーを使役する為、私を呼ぶ時は大抵長距離を移動する時だ。今日もそうだと思っていたのだが、呼び出された場所は街の真ん中だった。

普段は噴水のある場所に、派手に飾り付けられた木が聳え立ち、その根元にはプレゼントの箱が積まれている。

どうやら、古都ブルンネンシュティグらしい。

周囲に人がひしめき合い、基本的に常ににぎやかな場所だが、今

日は随分と人が多い気がするのはいのせいだろうか……。

しかも何だか妙にこう、意気揚々と戦う気満々の雰囲気漂っている。平和なはずの街に何が起こっているのだろうか。

疑問に思っていると、主が声をかけてきた。

「きたきた」 待ってたよ、ケルビ！」

主は随分と上機嫌だ……いや、不機嫌な姿の方が想像できないが……いつにも増して楽しげである。

「今日はケルビにお願いがあって呼んだのー（。。\*）」

ふむ？

ウィンディーやスウェルファアでなくて私に用があるのだろうか。  
「ウィンディもスウェルファも、ヘッジャも試したんだけど、やっぱりケルビが一番だと思ったんだよねー」

何、ヘッジャーまで呼んだのか？

それでも満足しなかったとは、一体どんな用事なのだろう。

期待半分、不安半分で主の行動を見守ると、何処からともなく何かを取り出したかと思えば、ずぼと頭に被せられた。

な、何だ！？

予想外の行動に、反応が遅れてしまう。

見かけによらず意外とすばやい主はその隙を見逃さなかった（敏捷固定１１１は伊達ではないのだ）。

「おおっ！ ケルビ、似合うー ヽ（。。\*）ノ」

きゅつとあごの下辺りで紐らしきものを結ばれ、ようやく自由にされる。何だろう……頭の上に何か乗っている……。

困惑する私を他所に、主は上機嫌で話を進めた。

「これからねー、パーティするんだよ サナちゃんとルーがごちそう作ってくれて、ルイちゃんがツリー取って来てね、あたしが飾りつけしたんだー（。。\*）」

待て、ツリーとは取るものなのか……？

……いや、それはどうでもいい。一体、私が呼ばれた理由はなんなんだ？

「ツリーもあって、骸骨までサントになるくらいなんだからトナカイもいないとね！（。 。 ） 〓 3」

「どういう理屈だ？」

「という事で、ケルビはトナカイ役けてーいぐ（。＊ノ」

$$\begin{array}{r} > i \\ 1 \\ 5 \\ 7 \\ 5 \\ 3 \\ \hline 1 \\ 4 \\ 5 \\ 8 \\ < \end{array}$$

•  
•  
•  
•  
•  
•

…繰り返す言う。私は火を司る神獣であつて、犬ではないし

トナカイでもない。

「ケルビなら赤いし完璧だよ！d(。。(´)＝3」  
何故赤いと完璧なんだろう。

そんな事を自信満々に断言されてどうしろと言うのだ。  
だがしかし、召喚獣の悲しさ、主に命じられば従う以外に道はないのだった…。

$$\begin{array}{c} + \\ + \\ + \end{array}$$

「チエナ！　召喚獣で遊んじゃダメでしょ！？　かわいいそうじゃないの！（、ワ、；）」

「えー（。。）（、）」

「えー、じゃありません!!」

結局、主の自宅に着くと私の変わり果てた姿を見た主の姉が同情してくれた結果、比較的早くトナカイ姿から解放される事になった。  
やれやれ…、助かった。

ちなみに取ってきたツリーとは、変わり果てた姿のトレントだった。

…一応、あれも神獣なのだが……。

いろいろ飾り付けられた姿にかつての面影はない。まさかこんな事になるとは彼も思わなかった事だろう。私はそつと物陰で涙を拭いた。

姉に叱られてしばらく不満そうにしていた主だったが、その内また上機嫌に戻ると私に話しかけてきた。

「ねえねえ、ケルビ。家があるって、いいねえ（。。\*）」

私は神獣なので、それがいいものかよくわからない。けれども主が幸せそうだったので、多分良いものなのだろうと思う。

帰れる場所があるという事は、おそらくきつと。

私は目の前に置かれた肉付の骨をどう処理していいものか悩みながら、楽しみに談笑する主とその姉妹を見守った。

だから犬じゃないと何度言えば（略）

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

\*中の人の呟き\*

別タイトル：「あるケルビーの悩み」でした（笑）

## サマナーの願い事。(後書き)

<『物理魔女の記録』より転載>

Copyright © 2010 L&amp;K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.

Licensed to GameOn Co., Ltd.

この手で守れるものは。  
(前書き)

四姉妹が生まれる前の一幕。

この手で守れるものは。

> i 1 5 8 6 3 — 1 4 5 8 <

最初の記憶は空白。

空白にも等しい、真白な世界。

そこが何処だったのか、何処にあるのか、もう思い出せない。ただわかる事は、もう二度とその白い場所には戻れないという事だけだ。

今となつてはもうおぼろげだが      この身は罪を犯した。だからあの場所から、追放されたのだ。

直接手を下した訳ではないからか、命を奪われる事はなかったが、その代わり欠落し続ける記憶を抱え、いつ果てるともしれない長い長い時を生きる事になった。

何処から来て、何処へ行くのか。

それを考える事はおそらく無意味で、非生産的な事だ。

教会に仕える聖職者として各地を回り、時として人々を助け、神の教えを伝える。場合によっては自ら武器を取り、戦う事もあった。悪魔とそれによって狂わされた生き物達を倒す事は、彼に一種の贖罪として課された使命でもある。けれど彼等を打ち滅ぼした後に彼に残されるのは、いつだって苦い虚しさばかりだった。

こんな事はしたくはない。そう思うのに、今まで延々と繰り返してきたその事以外に、他にやるべき事もなければ、他に出来る事も思いつかない。

己の手が命を奪うほど、記憶の中の空白は遠ざかって行くような気がする。

あの空白を忘れてしまう事が出来たなら、こんな虚しさを感じずにいられるのだろうか。全てを忘れて、生きてゆく事が出来たなら。

そんな物思いを、何かが駆け寄ってくる軽い足音が遠ざけた。

「ビショップさまー！ こっちモンスターがいますー！」

目の前の茂みからぴょこりと飛び出てきたのは、一匹のうさぎだった。驚くべき事に、人語を話している。

けれど彼は眉一つ動かさずにひょいとそのうさぎを抱き上げた。

「そうですか。それはありがたいですが…いくらモンスターに気付かれないからと言って、危険な場所に一人で行くのは感心しませんね」

「ご、ごめんなさい。でもこれくらいはしないとご恩返しになりませんもの！」

「律儀なうさぎですね…。恩返しと言っても、畏から助けてあげただけでしょう。とつくにその分くらいは返してもらっていますよ？」

「まだまだ足りません！ だって命の恩人ですもの。わたしの気が済むまで御一緒させて下さいませんか？」

「…私の旅は終わりのないものです。それでも着いて来るつもりですか」

「じゃ、邪魔ですか…？」

恐々とうさぎが見上げて来る。保護した時から思っていたが、どうもこのうさぎはやたらと人間くさい。

出来れば元いた場所に戻した方が良さと思うのだが、かと言って人語を操るうさぎなど他の人間に見つかればどんな処遇をされる事か。

そもそも、人間の仕掛けた罠にやすやすとはまっている時点で、普通のうさぎより危険を察知する能力が低いような気がしてならない。

（悪魔の影響だろうか…それにしても邪悪さを感じないが……）

しばらく黙考した後、彼は小さく嘆息し、抱えていたうさぎを肩に乗せた。



「私には戦闘能力がほとんどありませんから、あなたまで守れませんよ」

「大丈夫です！ 自分の身は自分でちゃんと守ります。御迷惑はおかけしません！」

「そうですか。…じゃあ、行きましようか」

「…！ はい」

この手にはおそらく、かつてほどの力はない。

果たしてこのかよわいうさぎ一匹、守れる程の力すらあるかどうか。そう、あの時ほどは。

（…あの時？）

思い返せば、そこに空白がある。

思い出せない場所、思い出せない記憶。取り戻したいのか、忘れたいのか…それすらも曖昧で。

「ビショップさま、心配しないで下さい。わたし、こう見えても結構強いんですよ！」

黙り込んだ彼を誤解してか、肩に乗せたうさぎが自信満々に言う。

「……。そうなんですか。それはすごいですね」

「何ですか、その棒読み。さては信じてませんね！？」

「当然でしょう。そんな事を言う前に、畏くらい避けて通れるようになるべきでは？」

「はっつ！」

彼の遠慮のない言葉に、うさぎはがくりと打ちのめされたようにうなだれる。

変なうさぎだ。話していると、相手がうさぎである事を忘れてしまいそうになる。…そう言えば、誰かとこんな風に他愛のない事を話したのはすごく久しぶりな事かもしれない。

「ついて来るのが嫌になりましたか？」

問いかけると、がばりと顔が上がる。

「いいえっ、まったくっ！」

何処か自棄にも感じられるほどの必死さに、つい彼は吹き出した。

一体何がこのうさぎにここまでさせているのかわからないけれども、きつとこのうさぎがいる限り、思考をあの空白に囚われ続ける事はないだろう。

「本当にどうなつても知りませんよ？  
…まあ、即死さえしなければ復活は可能ですか……」

「ビジョップさま、さらっとひどい事言ってますんか……?」

「戦つて守る事は出来ませんが、死からは遠ざけられると言っているだけです。…私が先に死んでしまつたら意味はないですけどね」

この手に守れるものはさしてないけれど。

この肩にある温もりが消える事のないように。

[illegible]

四姉妹父と母の若干シリアス寄りの小話。

父は結構後々まで母を人語をしゃべるうさぎだと信じきっていて、母は母で抱っこされたり肩に乗ったりと甘え放題だったばかりになかなか正体を言い出せなかったという裏設定を文章化したもの。

母は当然ながらうさぎ変身（姫スキル）マスターです。

この手で守れるものは。(後書き)

<『物理魔女の記録』より転載>

Copyright © 2010 L&amp;K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.

Licensed to GameOn Co., Ltd.

## ある夏の日。(前書き)

四姉妹が海水浴に行ったようです。

## ある夏の日。

> i 1 7 0 2 4 — 1 4 5 8 <

木立を抜けると一気に視界が広がった。そこにあるのは、何処までも鮮やかな青。

「わーい、海だー！！（。。\*）ノ」

チエナの歓声が上がる。

「やつと着きましたわね！」

ふう、と額に浮かんだ汗を拭いながらも、ルフエルトナも笑顔だ。場所は港街ブリッジヘッドの東を流れる川、ルリリバーを超えた場所。一面に広がる砂浜が美しい海岸。

普段はそれぞれで狩りに露店にと動いている姉妹だが、今日は珍しく四人揃つての遠出だ。たまには四人で海でも行こうと提案したのは、サナティーラだった。

「変な場所には入らないのよ。危険な所もあるんだから」

長女らしく、サナティーラが注意を促す。

一見平和そうだが、ここもまったくモンスターがいない訳ではない。今の四人では太刀打ちできない高レベルのモンスターが潜む洞穴があるとも聞いている。

「わかつてるもん」

「心配無用でしてよ！」

下二人は知っているとばかりに胸を張る。

まだまだ子供だが、どちらもそれなりに経験を積んだ冒険者だ。

この辺りに出没するモンスターくらいなら、さほど苦勞もせずに撃退するに違いなかった。

そんな様子を眺めつつ、ルイトルドは黙々と準備する。

普段は寝る時以外は肌身離さず身に着けている弓矢を外し、軽い皮で仕立てられた鎧を取る。元々、他の三人に比べて軽装だ。準備

はすぐに完了した。

「あつ！ ルイちゃんずるい！！」

チェナが気付いた時には、すでに海に向かって突き進んでいる所だった。

「こら、ルイー！ ちゃんと準備運動をしなさい！！」

背後からサナティーラの怒声が飛んでくるが軽く聞き流す。一見そうは見えなくとも、今日という日を楽しみにしていたのは、ルイトルドもなのだ。

ザッパーン！

足を踏み入れると同時に正面から波を被る。炎天下を歩いてきた肌に、海の水は心地良い。

砂浜を振り返って見れば、我もとばかりに続く妹二人と、やれやれと苦笑するサナティーラの姿が見えた。

いつもは一人でもあまり気にならない。元々単独行動が基本であるし、海だって来ようと思えばいつでも来られる。

それでも昨日の夜から楽しみだったのは、家族と一緒にからだ。姉妹四人が揃って生活を始めて、さほど時間も経っていない。ずっとばらばらだったからこそ、共にある時間がとても貴重に感じられた。

「サナも早く来ればいいのに……」

言いだしつぺなくせに、なかなか海に入ろうとしないサナティーラの姿にぼそりと呟けば、チェナと水をかけ合っていたルフエルトナがおや、と言うように手を止める。

「……もしや」

「もしや？（・・―・・）」

「サナってカナヅチ……でしたかしら……？」

「え、いくらなんでもそれはないんじゃないのかなあ（。。；）」

「……」

三人の視線が自然とサナティールに集まる。その視線にぎくりとサナティールが身を強張らせた。

「な、なに？ 三人とも……（ハワハ；）」

不自然な笑顔のままじりじりと逃げ腰になると、三人が動いたのはほぼ同時。

「スウェルファ、行つけー！（。。\*）ノ」

「い、いやあああ！……!?」

「逃がしませんわ！！」

チエナが召喚<sup>よび</sup>出した水の神獣・スウェルファアがサナティールに襲いかかり、慌てて逃げようとした所をうさぎに変身したルフエルトナがすかさず退路を塞ぐ。

その隙に槍を手にしたライトルードが一気に距離を詰めた。こんな時の為に（？）追撃用ランサースキルを習得した事は秘密である。

「ふふふふ……（・ー・+）」

「な、なな、なんでそんなに楽しそうなのよ、あんた達はー！！（トワトーー）」

妹達（+召喚獣）に囲まれたサナティールはすでに涙目だ。

「大丈夫大丈夫……痛くないから」

「何がー!?」

「いつせゝえのっ」

「い、いや、ダメだって、あ、ちょー!?」

そのままサナティールは、抵抗も空しく、情け容赦もない手により海へと放り投げられた。

ザッパーン！

青い海に高く水しぶきが上がる。

「ほらっ、気持ちいいでしょサナちゃん！（。。\*）ノ」

「折角来たんですから楽しまないと損でしてよー！」

ねー、と頷き合う下二人。一見その光景は微笑ましい。

だが、ふとルイトロッドは気付いた。当然返ってくると思ったサナティーラの怒声どころか、波音以外の音がしない事に。

「……浮いてこないんだけど……」（・・・）  
「……!?」  
「……」

ルイトルードの言葉に呑気に構えていた二人もぎょつと目を見開いた。

普通、人の身体は浮くものなのだが、水しぶきがあがった辺りに確かにサナティールらしき姿がない。

「ササササ、サナちゃん！？<。——（>」

「どうでしょう…お、沖に流されたりしてませんわよね!？」

「と、ともかく早く探さないと……」（・・・）

海水浴どころではなくなった三人は慌てて長女の姿を探し始めた。

その後、スウェルファールによつて無事に沈没していたサナティールが救出され、サナティールがまったく泳げない事が判明した。

「だったら何故海に行こうなどと言ったのか、と問われたサナティ  
ーラは涙ながらに語ったという。

「だってだって、家族で海水浴って昔から憧れだったんだものー！  
！（つワT）くウワーン！」

結局これで懲りたのか、サナティーラが自分から妹達を海へ誘う事は二度となかったという。

[illegible]

舞台のイメージは「半島の海辺」マップです。

あまり狩場としては使われない場所だけど、個人的には結構好きな場所だったりします。

なお、サナは山（スマグ）育ちという設定なので全く泳げません（笑）



ある夏の日。(後書き)

<『物理魔女の記録』より転載>

Copyright © 2010 L&amp;K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.

Licensed to GameOn Co., Ltd.

## ルフェルトナの日課 (前書き)

夕暮れ前、出かけていた姉達が帰って来ます。

## ルフェルトナの日課。

「古都・ブルンネンシュティグの一角にあるとある小さな家にて」

「ただいまー（・ワ・）」

「あら、サナ。お帰りなさい。今日も河口ダンジョンでしたわね。依頼の調子はどうでしたの？」

「……うつ（・ワ・）」

「えつと…その、また明日がありますわ（汗）」

「そうかなあ、そうだよねえ、がんばる〜」（つワ）<うわああん

+ + +

「…ただいま……（・ー・）」

「きやあ！？ お、お帰りなさい。ルイ…いつも言ってますけど、いきなり背後から現れるのはやめて下さいな。心臓に悪いじゃないですかー！」

「……（・皿・）」

（なんですの、その不満そうな顔は）

+ + +

「ただいまー！！ゞ（。。\*）」

「お帰りなさい、チエナ。…あら、山葵わさびが抱えているのはなんですか？」

「えつとねー。今日はねー、依頼で砂漠でサソリの殻集めしてたの

（。。\*）」

（…嫌な予感）

「でね、サソリってエビに似てるなーと思ったからいくつか持って帰ってきてみた（。°。\*）＜食べられる？」  
「って、まだ生きてるじゃありませんのー！！！」

+ + +

…はあ、本当にわたくしの姉達は困った方ばかりですわ。  
しかも揃いもそろってボケばかり…！！  
毎回ツツコむのも大変ですよ…っ。  
少しは迎える側にもなってみたらいいんですわ！！

「ルー、ご飯よー（・ワ・）」

「今日もよく働いたわ…（・ー・）＜グルキュー」

「もうサソリいないから大丈夫よー？ゞ（。°。\*）ノ」

「はいはい…あら、このお花はなんですか？」

「あ、きれいでしょー（・ワ・\*）」

「ええ、とても素敵ですわね」

「夕御飯の買い出しの時に見かけてね。ルー、お花好きでしょ？だから買ってきたの」

「え…っ、わ、わたくしのため、に？」

「いつもお留守番してくれてるからたまにはね！（ハワハハ）」

「サナ…わたしには…？（・ー・）っ」

「あんたはいつも好き勝手やってるでしょ（＝ワ＝メ）＜厚かましい」

「ルー、良かったねー 今度はわたしがお留守番するからどこか遊びに行っておいでよ！（。°。\*）」

「…あ、ありがとうございますわ……」

「ルー、顔赤いわよ（・ー・）＜クス」

「…！ 気のせいですわ！ ゆ、夕陽のせいですわよー！！」

「はいはい（＝ワ＝ノノ）。°（もう、ツンデレさんなんだから）」

さ、ご飯が冷めない内に食べましょー」

> i 1 8 1 5 8 — 1 4 5 8 <

∴ 本当に困った姉達ばかりだけど、やっぱり嫌いにはなれませんか。  
の。

明日も何事もなく、みんなにとってよい一日になりますように。

ルフェルトナの日課。(後書き)

<『物理魔女の日課』より転載>

Copyright © 2010 L&Amp;K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.

Licensed to GameOn Co., Ltd.

歌のスパイス。(前書き)

四姉妹のある日の食卓。

## 歌のスパイス。

職業は数あれど、リトルウィッチの特徴と言えばこの一点に尽きる。

”歌”。

時に味方を鼓舞し、時に味方を助けるそれは、ウィザード達の使用する魔法ともビショップが与える神の加護とも一線を画する。

彼女達は時として異端者と見られる事もあるが、その歌声を純粹に愛でる者も少なくはなかった。

「るんるー らーらー」

古都ブルンネンシティグの一角にある小さな一軒家から、今日も何処か呑気な鼻歌が聞こえてくる。

歌詞もなく、ただ思いつくままに音を口に乘せただけのそれは、それぞれの家路につく人達の足を僅かに留める。

しばしその歌に耳を傾けた人々はやがて疲れた表情を和らげ、その足取りを心持ち軽くしていた。

心から楽しげなその歌声は、特に魔力など込められてはいないのに、人の心を和ませる力を秘めているのだ。

それはその家にとある四姉妹が暮らすようになってから日常茶飯事の事。中にはその歌声を聞く為に、わざわざ遠回りをして帰っている者さえいる。

近所の人々も特に口にはせずとも、その歌声が聞こえてくるのを密かに楽しみにしていた。

もつともそんな事が家の外で起こっているなど、当の歌声の持ち主とその家族は知る由もなかったのだが。



+ + +

「るらーらー …… っと、よし出来た!! ルー、お皿持ってきてー(・ワ・)」

華麗にフライパンの中身を返し、サナティーラが声をかける。

今日のメインディッシュは野菜いっぱいオープンオムレツ。スープはそれに合わせてトマトであっさり。

「ちよっとお待ち下さいな、今持って行きますから!」

台所の隅の棚から皿を選んでいたルフエルトナが、少し焦ったように返事をする。

普段は家族の誰かが何処かに出かけている事が多く、全員が揃って夕食を囲むのは久しぶりだ。

全員で一つの皿をつつくという事も滅多にない為、丁度良さそうな大きさの皿が棚の奥に仕舞いこまれていて、出すのに四苦八苦しているらしい。

「おーなーかーすーいーたー」

やはり焼き出す前に皿を出しておけば良かったかとサナティーラが思っていると、早くも食卓についているルイトルドがフォークを片手にまだかと急かす。

「だったら少しは手伝いなさいよ。いつも座って待ってるだけじゃないの! (「ワッメ」)」

末の妹ですら率先して手伝っているというのに、と眉を吊り上げるサナティーラに、ルイトルドはとんでもないとばかりに反論する。

「そんな事はない。サナがない時はちゃんと作るし……」

「えっ!? ルイ… あんた料理なんて作れたの……?」

四姉妹の中で一番料理が上手なのはサナティーラだ。結果的にサナティーラがいる時は台所に立つのはもっぱら彼女である。

それ故にか、サナティーラは自分のすぐ下の妹の料理を一度も拝

んだ事がなかった。

「わたしはやればできる子よ（・ー・+）」

自信ありげに微笑んで見せるルイトルードに、サナティーラは自分の認識を改めざるを得なかった。

（てつきり料理が出来ないと思ってたのに……！！）

狩りにおいては四姉妹の誰より高い効率を叩き出すが、通常時は我が道を行くマイペースさで家庭的とはいえない  
そう、思い続けていたというのに。

今になって知る事実に目を丸くしていると、ようやく皿を出せたルフェルトナが神妙な顔で首を横に振った。

「サナ：ルイの料理は一種の芸術ですわ」

「へ？」

言葉の意味を図りかね、サナティーラが首を傾げていると、そこに外へパンを買いに行っていたチエナが帰ってきた。

「たっだいまー！ あっ、今日はオムレツなの！？ 美味しそう  
べ（。。\*）ノ」

「お帰り、チエナ。パンは買えた？」

「あ、うん！ お店が閉まる前だったから安くしてもらえたよ

山葵<sup>わさび</sup>ー、こつちにパン持ってきてー！！」

チエナが玄関先に声をかけると、そこから紙袋を抱えたモンスターがのそのそと入ってくる。

ゴートマンという種族のモンスターだが、チエナに訓練されてモンスターとしての狂暴性はない。『山葵』という名を与えられ、今ではすっかり家族の一員だ。

「山葵、ありがとね（ハワハ）」

袋を受け取り、サナティーラが礼を言うと山葵は嬉しそうに頷く。ごつい鎌を持っているし見た目も怖いが、見慣れると可愛く見えてくるから不思議である。

「さて、全員揃ったし……って、ルー、さっきの続きだけど『芸術』って何よ？」

「なにになに？ 何の話ー？（。。\*）」

「ルイの料理が『芸術』という話ですわ……」

何処か疲れたようなルフエルトナの説明に、思い当たる事があるのか、チエナがぼんと手を打った。

「あー…、確かにあれは一種の芸術だね！」

「それってまさか…芸術的に美しいって事？」

> i 2 2 9 0 8 — 1 4 5 8 <

『芸術』という表現からはそれしか思いつけず、今までリイトルードに芸術的感性があると感じた事のないサナティーラは心底混乱した。

混乱しつつもオムレツの盛り付けは忘れない辺り、すっかり主婦である。

「ふっ、それほどでも」

「いや、褒めてないよ？」ですわ」

早速つまみ食いをしながらリイトルードが鼻先で笑う横で、チエナとルフエルトナは同時に否定の声をあげた。

「ルイちゃんのご飯って、見た目と違う味がするのー（。。、）」

「芸術と一緒にすわ。『わかる人にしかわからない』、不味くはないのですが…その、一般人には理解しがたい味わいと申しますか…」

「そ、そう……」

過去に口にした事があるらしい妹二人の説明に、サナティーラはそれ以上追求する事を諦めた。そして以前からもしやと思っていた事が、事実である可能性が高いと確信する。

サナティーラも最初から料理が得意だった訳でもなく、最初は焼きすぎたり少し焦がしてしまったりという失敗もあった。

それを今までリイトルードは全部文句一つ言わずに完食したばかりか、『美味しい』と言っていた事を思い出す。今まではてつきり、

ルイトルドなりに気を使っているのだと思っていたのだが。

(やっぱりルイは味オンチ……！？)

事実関係は不明だが、事実なら四姉妹の食卓において非常に由々しき事態と言えた。サナティーラも家計を担う稼ぎ手の一人だ。常に家にいるとは限らない。

これは下二人の為に早急になんとかしなければと心に誓う長女だった。

+ + +

「サナちゃんのご飯は美味しい」

幸せそうにオムレツを口に運びつつ、チェナが言うのにルフェルトナも不思議そうに同調する。

「オムレツならわたくしでも作れますけど…何が違うのでしょうか」  
人並みは料理が出来ると思ってはいるが、そこまで褒められる腕前を持っているとは思っていないサナティーラは照れ隠しも込めて否定した。

「普通のオムレツだから！二人とも、そんなに褒めたって何も出ないからね！」

「だって美味しいんだもん(。\* ) ねっ、山葵」

チェナの隣でご相伴にあずかっている山葵もこくりと頷いて同意を示す。

これは余程自分がない時の食生活がひどいのかと心配になった所に、現在味オンチの嫌疑をかけられているルイトルドがぼそりと呟いた。

「… 歌」

「え？ 歌？」

「そう、作る時いつも歌ってるでしょ(・ー・)」

ルイトルドの言葉にサナティーラは今までを思い返してみた。

「歌っていうほどのものじゃないけど…まあ、歌ってるわね。それ

がどうしたのよ？」

リトルウィッチにとって、『歌』は身近にあるものだ。狩りの場においても歌っている事もあり、気付くと無意識に歌っている事も多い。

「多分、そのせい」

「は？」

思いもしない指摘に、サナティーラだけでなくチェナもルフエルトナも目を丸くする。

「歌のせいって申しまして……リトルウィッチの歌に料理を美味しくする効果まであるなんて初耳でしょ？」

「サナちゃんが歌つてるところも楽しくはなるけどねー」

「サナの腕前以外に理由があるなら、それしかないと思うだけ（・――・）<モグモグ」

そんなはずはないだろうという反論に、リトルルドは淡々と答える。

その一方で手は休まず動いており、気付くとオムレツの三分の一が早くもリトルルドの胃に消えている事に他の三人はまだ気付いていない。

「サナの事だもの。作る時はパーティーで歌う時みたいに気持ちを込めてるでしょ」

「まあ……気持ちというか、『美味しく出来ますように』と思いながら作りはするけど。でもそれって誰でもそうじゃないの？（・ワ・；）」

「少なくともわたしは『食べられるものが出来ればいい』としか思っていないわよ（・――・）」

「……」

「……」

「………そ、そう」

ある意味潔い答えに、他の三人は心の内で頭を抱えた。

「それに、サナの料理は母さんの味に近いから」

「……！」

「あ、そっかあ！」

「え、そうなの？（・ワ・；）」

今度の表現は作り手以外にとつて納得の行くものだったらしい。今では生きているのか死んでいるのかすら定かではない両親。家族揃って生活していた時期はとても短い。

もう一度全員揃って食卓を囲む日が来るのか　その可能性はとても低いに違いなければ、姉妹の誰もがそんな日が訪れる事を願っている。

何しろ世界各地でバラバラに預けられた自分達がこうして再会して一緒に暮らしているのだ。世界の何処かで生きているのなら、決して不可能な夢ではないだろう。

「ルイちゃんって、サナちゃんの事本当によく見てるよねー（\*）」

感心した様子のチェナに、ルイトルドは珍しく照れたような表情を見せる。

「ふふ…、まあね（・ー・／／）」

「いや、そこでなんで頼染めるのよあんたは？」

（サナもサナで、どうしてルイが重度のシスコンだと気付かないんですの……）

おそらくそれは、ルイトルドの愛情表現が斜め上を行きすぎているせいなのだろうが、面倒だったのでルフェルトナは説明するのを投げた。

それどころではない事態に気付いたからでもあるが。

「　　って、ルイ！　自分ばかり食べないで下さいませー！」

「ほえ？　…あああああ！？　オムレツがもうこんなにちよっぴりー！！」

ようやくオムレツの減り具合に気付いた下二人の悲鳴に、当の本人は相変わらずのマイペースで答える。

「食べないからいらないのかと思って（・ー・）」

「そんな訳ないでしょー！？ ルイはもうそこまで！！（、ワ、；）  
<食べ過ぎ！！>」

（（まさか最初から狙って『歌』の話題を……？））

こう見えて意外と知能犯だったりする次女に、他の姉妹はそんな疑惑を抱いたが、すぐにその疑惑を横に置き、残り僅かなオムレツを等分する作業に取り掛かった。

結局、サナティエーラの料理が特別美味しい理由が、本当に『歌』にあるのかは謎のままである。

歌のスパイス。(後書き)

Copyright © 2011 L&amp;K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.  
Licensed to GameOn Co., Ltd.



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6498p/>

---

物理魔女の記録

2011年4月28日21時40分発行